

石盤休閑 3横綱

紙相撲新聞

第158回本場所
初日～三日目

編集・発行
日本紙相撲協会

千代 若嶋 春翔 大神楽 3連勝スタート

横綱大関3連勝は121回以来14年ぶり

〔第百五十八回本場所初日～三日目〕

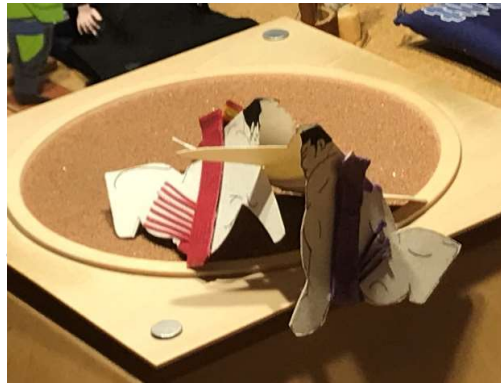
東京に大雪が降った翌日の2月11日、第158回本場所が幕を開けた。1月初旬に開幕予定だったが、協会内で新型コロナウイルスが蔓延した関係で初日の開催が1ヶ月延びる形となった。

今場所は大関で2連覇を成し遂げた千代鈴が横綱に昇進し、2場所振りに若ノ嶋、春ノ翔を加えた3横綱となり、大関は大神楽一人という番付となった。



↑新横綱千代鈴は太刀持ち西神門、露払い大渡海を従えて堂々の土俵入り。三揃えは後援会から贈られたSPY FAMILYのイラスト。

↓緊張の新横綱初日、小結に復帰し、好調の白閃光を落ち着いた取り口で下し、春日根親方もほっと一安心。



初日は白閃光を、二日目は綱乃花を危なげなく寄り切りにしたが、三日目は四季嶋に對して左を差して最後は寄り切ったものの、土俵を這うところだった。

なるといよいよ千代鈴一強時代の始まりとなりそう。そうはさせじと闘志を燃やす先輩横綱の若ノ嶋と春ノ翔が、休場明けにどういった相撲を見せるのかが見ものだ。

千代鈴に先を越された大神楽も横綱への意欲は衰えておらず、3横綱ともに優勝争いを引っ張って行く一翼を担いそう。また、大関の空席ができたことで、閑脇の鹿富士と鬼ヶ嶽の大関争いも楽しみみなど。

今場所も見どころ満載の中、初日から三日目までが行なわれ、横綱大関4人がそれぞれ持ち味を発揮し全員が3連勝を飾った。横綱大関全員の初日から3連勝は、第121回以来、37場所振りのこと。この時は横綱英、大関が鞍ノ城、蛭勇の1横綱2大関だった。

さらに3横綱の初日からの3連勝は、遡ること第17回（昭和30年8月）以来、141場所振り（67年振り）の快挙。この時は、荒登、富士昇、田子ノ浦の3横綱だった。

三役陣の3連勝はこの横綱大関の4人のみ、平幕では月山、出羽翼、宇治家、勝ノ川、大渡海の5人が3連勝を飾った。

新横綱千代鈴は、紙相撲ファンの前で初めてとなる横綱土俵入りを披露した。

「ちよつと化粧まわしが大きすぎましたかね？」と千代鈴の体の開きをそのままで土俵入りをしたの思いから、春日根親方が作った化粧まわしと綱は、かなり大きく不格好な出来になってしまった。そのため、露払いの大渡海が乗り切らずに土俵から転落するハプニングがあった。

「今場所はこれで勘弁して下さい。来場所は作り直しますの。」と平謝りの春日根親方だった。初めての土俵入りのハプニングがあったものの、相撲は先場所に引き続きどっしりとした安定感のある横綱相撲をみせた。



千代鈴○(寄り切り) ●綱乃花



四季嶋●(寄り切り) ○千代鈴

先場所勝ち越しに大手を賭けながら十日目から途中休場した横綱若ノ嶋。佐賀ノ海の黒雲部屋への電撃移籍があり、場所前に久し振りに臨んだ。

初日はいきなり新小結綱乃花との対戦。「初日から嫌な相手と当たったなあ。」と錦風親方。本場所での対戦はこれが初めてだが、綱乃花の新入幕が決まった場所前に三番稽古をやったことがあり、その時は綱乃花に左を差される相撲が多く分が悪かった。しかし、初顔の一番では綱乃花の左差しを許さず力相撲で寄り切った。



若ノ嶋○(寄り切り) ●綱乃花

二日目は四季嶋との対戦。左を差される絶体絶命の体勢となったが、ここから若ノ嶋の真骨頂。粘って左に振り回すと四季嶋の足が土俵を割った。「あれ？こんな体勢で勝つのか？そお！」と十分の勝ちを確信した勝間田親方だったが、まさかの敗戦に悔しさを露わにした。



若ノ嶋○(寄り切り) ●四季嶋

初日は白閃光を、二日目は綱乃花を危なげなく寄り切りにしたが、三日目は四季嶋に對して左を差して最後は寄り切ったものの、土俵を這うところだった。

